

デフリンピックの過去と現状

小倉和夫

2025年11月15日から26日にかけて、東京2025デフリンピック大会が開催される。これは、日本で初めて開催されるデフリンピック大会である。本論文は、筆者が過去にパラリンピック研究会紀要に発表した複数の論文に大幅な加筆修正を加え、改めてデフリンピックの過去と現状について考察を加えたものである（末尾引用文献：小倉，2018；小倉，2023；小倉，2024）。

1. ろうあ者と聴覚障害者

デフリンピックとは「聴覚に障害のある人」の国際スポーツ大会であり、オリンピック、パラリンピック、スペシャルオリンピックスと並んで、国際オリンピック委員会がオリンピックという冠をつけることを正式に認めた国際競技大会とされている（内閣府，2023，p.130）。

学問的には、聴覚障害学という言葉が通常使われており、また、厚生労働省の統計などでも、「聴覚・言語障害者」が、身体障害者の一分類として使用されている（たとえば、厚生労働省の「身体障害児・者実態調査」などでは、聴覚障害者も身体障害者の一部として取り扱われている）。

しかし、障害者のオリンピックともいわれるパラリンピックには、聴覚障害者は参加していない。さらに、全国障害者スポーツ大会では、陸上、水泳、アーチェリー、卓球、フライングディスクの競技に聴覚・平衡機能障害、言語障害者の参加が認められているが、同時に、全国ろうあ者体育大会が存在する。

このように、スポーツあるいは福祉に関連する分野に限っても、「聴覚障害者」の定義は明確とは言い難く、とりわけ、「ろう者」という概念と聴覚障害者の概念の違いについて、ややもすると混乱を招きがちである。

しかし、近年、手話言語条例の広がりもあって、耳の聞こえない者あるいは、聴覚障害者という概念と「ろう者」という概念の違いが強調されるようになった。すなわち、

ろう者とは、「日本手話という、日本語とは異なる言語を話す言語的少数者である」（木村・市田、1996）といわれるようになった。こうした概念を用いることによって、聴覚障害者を医学的、身体的障害を持つ者とする見方から、言語的な意味での社会的少数者とする見方へ転換させようとしていると言えよう（ちなみに、英語では、小文字の deaf と大文字の Deaf を区別し、後者をもって、日本における「ろう者」の概念にほぼあてはまる概念とする場合が多い）。

聴覚に困難を有する者を表す用語は複数あり、スポーツ大会や団体の名称においても、「全国ろうあ者体育大会」「アジア太平洋ろう者競技大会」「一般社団法人日本デフ陸上競技協会」というように、異なる用語が用いられている。本稿では、依拠したデフリンピック報告書において、選手当事者によって最も多く使われていた「ろう者」で統一した。ただし、固有名詞に関してはこの限りではない。

ちなみに、耳の不自由な人を身体障害者として見ず、一般社会における言語的少数者としてみるという見方は、文化人類学上著名な著作 *Everyone Here Spoke Sign Language*（日本語版書名『みんなが手話で話した島』）（Groce, 1985）を読めば、その社会的意味が容易に理解できよう。この書物は、米国北西部、マアチューセッツ州の沖合に浮かぶマーサズヴィンヤードという島の物語である。そこでは20世紀のはじめころまで、圧倒的多数の住民が耳の聞こえない人であったため、島におけるコミュニケーションは全て手話で行われており、手話のできない健聴者は、いわばコミュニケーションのできない障害者であったというのである。この島の物語は、聴覚障害が医学的問題を越えて、実は社会的問題であることを示唆していると言えよう。

2. 聴覚障害の特質と対応

広い意味での身体障害は、多くの場合可視化される。いわゆる身体障害は義手、義足、車いすなどによって可視化され、視覚障害も通常の場合、見た目によって（たとえば動作や白杖によって）認知される。しかし、聴覚障害は、対人関係において会話しない限り、一見障害は「見えない」。その結果、補聴器などの導入には、いわゆるスティグマ現象への抵抗、すなわち、そうした障害を可視化する用具を装着することへの躊躇が生まれがちである（藤間・鈴木・小淵、2021, p.223）。

こうしたスティグマは、裏をかえせば、聴覚障害者が、「外見＝身体性による順序付けを拒否」すること（石川・長瀬、1999, p.162）へとつながる。言い換えれば、聴覚障害者における障害の克服は、障害者本人の努力や工夫（補助用具の使用など）だけによるとはいえない側面が強くなりがちである。すなわち、聴覚障害者に対する「バリア

フリー」化は、音声言語の価値、あるいは社会一般が持っている価値観の組み替え（白井, 2001, p.92）によってのみ可能となる。具体的には健聴者も含めた手話の普及といった対応が必要という考え方もあろう。しかし、そのいわば前段階として、聴覚障害者とのコミュニケーションの環境に物理的配慮を行うことが必要となろう。たとえば、「騒音がなく反響の少ない明るい部屋を選ぶ」「話し手の顔が暗がりにならないよう光源を背負う席に座る」「相手に近づく」など、補聴機器が苦手とする騒音、反響、距離の悪条件を減らし、さらに視覚情報を十分得るための光の活用といった対応が必要であろう（石川・長瀬, 1999, p.229）。

3. 聴覚障害者とスポーツ活動

義手、義足、車椅子などを使用する、いわゆる身体障害者にとっては、運動あるいはスポーツ活動は、いわゆるリハビリの一環としての意味を持ち、同時に、身体能力の復活あるいは障害の克服という意味を持ちうる。このことは、パラリンピックの原点が、脊髄損傷者のリハビリにあったことから明らかである。

しかしながら、聴覚障害者にとって、スポーツがいかなる意義や効果を持ちうるかについては、必ずしも自明ではない。特に、別表のとおり、オリンピックに出場した聴覚障害者もかなりの例があり、それから類推すれば、聴覚障害者にとってのスポーツの意義や効果は、健常者とさして違わないとみる意見があっても不思議ではない。

表1 オリンピック競技大会へ出場した聴覚障がい者アスリート（例示）

氏名	国・地域	競技	オリンピック出場年、成績	デフリンピック 出場年
Oskar WETZELL	フィンランド	飛び込み	1908ロンドン, 1912ストックホルム	
Gertrude EDERLE	アメリカ	水泳	1924パリ 4×100m自由形リレー金, 100m自由形銅, 400m自由形銅	
Angel ACUNA LIZANA	メキシコ	バスケットボール	1948ロンドン 4位	
Ignazio FABRA	イタリア	レスリング グレコローマンフ ライ級	1952ヘルシンキ銀, 1956メルボルン銀, 1960ローマ5位, 1964東京4位	1961, 1965, 1969
Ildiko REJTO-UJLAKI	ハンガリー	フェンシングフ ルレー	1960ローマ団体銀, 1964東京個人金, 団体金, 1968メキシコ個人銅, 団体銀, 1972ミュンヘン団体銀, 1976モントリオール団体銅	
Susan PEDERSEN	アメリカ	競泳	1968メキシコ 4×100m自由形リレー金, 4×100mメドレーリレー金, 100m自由形銀, 200m個人メドレー銀	
Gerhard SPERLING	東ドイツ	20km 競歩	1964東京, 1968メキシコ 5位, 1972ミュンヘン4位	1961, 1969, 1977

氏名	国・地域	競技	オリンピック出場年、成績	デフリンピック 出場年
Vyacheslav SKOMOROKHOV	ソ連	400mハードル	1968メキシコ 5 位	1965, 1969, 1973, 1977
George MASIN	アメリカ	フェンシング	1972ミュンヘン, 1976モントリオール	
Jeffrey FLOAT	アメリカ	競泳	1984ロサンゼルス 4 × 200m リレー金, 200m自由形 4 位	
Piero ITALIANI	イタリア	飛び板飛び込み	1984ロサンゼルス 6 位	
David WHARTON	アメリカ	競泳	1988ソウル400m 個人メド レー銀, 1992バルセロナ400 m個人メドレー 4 位	
Dean Bryan SMITH	オーストラリア	10種競技	1992バルセロナ	1985, 1989, 1993, 2005
Jueri JAANSON	エストニア	シングル, ダブル スカル	1988ソウル, 1992バルセロ ナ 5 位, 1996アトランタ, 2000シドニー 6 位, 2004年 アテネ銀, 2008北京銀	
Terence PARKIN	南アフリカ	競泳	2000シドニー200m 平泳ぎ 銀, 400m個人メドレー 5 位	1997, 2001, 2005, 2009, 2013
Frank BARTOLILLO	オーストラリア	フェンシング	2004アテネ	
Hugo PASSOS	ポルトガル	レスリンググレコ ローマン	2004アテネ	1997, 2001, 2005, 2009, 2013
Tamika CATCHINGS	アメリカ	女子バスケット ボール	2004アテネ金, 2008北京金, 2012ロンドン金, 2016リオ 金	
Norbert KALUCZA	ハンガリー	ボクシング フラ イ級	2008北京	
Maria Belen DUTTO	アルゼンチン	BMX (バイシク ル・モトクロス) サイクリング	2008北京	
Chris COLWILL	アメリカ	飛び板飛び込み	2008北京男子シンクロ 3 m 板飛び込み 4 位, 2012ロ ンドン	
Fausto QUINDE	エクアドル	50km 競歩	2008北京	
David Michael SMITH	アメリカ	男子バレーボール	2012ロンドン	

出典：筑波技術大学「デフリンピック啓発パネル」を参考に、パラリンピック研究会作成
http://deafstudies.jp/info/files/deaflympics_deaf_athletes.pdf (2017年9月25日)
 ICSD <http://www.deaflympics.com/athletes.asp> (2018年1月15日)

ここで、聴覚障害者にとってのスポーツの意義を考えるための視点として、他の種類の障害をもつ人々と比較してみたい。藤田が行った調査（全国障害者スポーツ大会参加者を対象とした調査，2010年）（藤田，2013，p.132）を参考に調べると，次のような特徴が浮かび上がる。

大会参加による身体的効果あるいは影響についての見方を評価するため，体力・身体機能が向上したと回答した聴覚障害者は，身体，視覚障害者に比べて若干高かった。同様に，心理的影響についての質問である「ストレスが解消されたか」についても，同じように，聴覚障害者の数値は比較的高かった。また，藤田は，社会的効果として「周囲の理解が向上した」という効果が認められたという。こうした結果をみると，スポーツ活動が聴覚障害者に与える影響は，他の種類の障害者と比べると，健常者の場合の影響

に近いのではないかと推測も成り立ちうるであろう。

他方、成人障害者の約30%は、平衡機能が低下していると言われる（中島・天野, p.168）。そうとすれば、平衡感覚が重要なスポーツ活動、たとえば体操などについては、聴覚障がいとの関係についてさらなる検討が必要かと思われる（注1）。

また、男性230人、女性90人のスポーツを行っている聴覚障害者を対象として行われたアンケート調査によれば、スポーツを行う目的としては、健康・体力づくり（180人）、気晴らし（149人）、仲間との交流（129人）が特に多く指摘されている（複数回答可）（五町, 2010）。

また、デフスポーツ団体協議会に加入する競技団体の会員341人を対象に行った調査によれば、スポーツを行う目的については、健康・体力づくりが182人、気晴らしが147人、仲間との交流が127人（複数回答可）となっている（齊藤・荒川, 2014）。

他方、スポーツ活動を行う上での困難については、前掲の藤田の調査によれば、物的側面（施設の有無）、人的側面（指導者不足）の双方において、聴覚障害者その他の種類の障害者との間に、有意な違いは見出されていない（藤田, 2013）。

この関連で、藤田の調査は、スポーツ開始時において影響を与えた「他者」についても行っているが、ここでは、他の障害者に比べ、聴覚障害者の場合は、家族、学校の教師の役割が大きく、友人、医療関係者、施設関係者などの役割の比較的大きい身体障害者とかかなり際立った対照を示している（藤田, 2013, p.156-157）。この点を、上記の「周囲の目が気になる」という反応が比較的大きいことと考えあわせると、聴覚障害者の場合には、日常接触している人の勧め、意見がスポーツ活動参加にとって特に重要であると見ることもできよう。

中村有紀が中心となって、台北デフリンピック大会への選手候補者（以下選手）について行ったアンケート調査（中村, 2009）によれば、スポーツ競技を始めたきっかけについては、39.7%の選手が自らやりたかったからだとしており、家族や友人の勧めによるとした者（49%）にかなり近い数値となっている。これは、藤田の調査対象者はろうあ者体育大会参加者であるのに対して、中村の調査の対象は、より競技性の強いデフリンピック大会選手であることにもよると思われる。また、中村の調査では、競技スポーツに参加する目的について、健康維持やストレス解消をあげたものは全体の3割程度であり、圧倒的多数の者が、競技力をあげていることも、同じような理由によるものと思われる。また、スポーツ活動の上で困難を感じた点（苦勞した点）については、68.9%の者が費用（財政的困難）を挙げていることが注目される。

なお、中村の調査における、健常者とのコミュニケーション上の困難についての自由記述によると、手話を活用しても、健常者とのコミュニケーションが十分とれないとの訴えが稀ではないことがわかる。たとえば、次のような点が指摘されている。

- ・手話通訳を介すると伝わらない部分あるいはズレや意志疎通のズレが生じる。
- ・一対一なら筆談などいろいろ工夫ができるが健常者の集団の中でのコミュニケーションは難しい。
- ・手話によるコミュニケーションは時間がかかる。
- ・手話は全国共通ではないので、読み取れない手話も多い。
- ・専門用語の手話に問題がある。

なお、聴覚障害者のスポーツ活動参加を促す制度的要因の一つとして、地域レベルにおける競技大会への参加資格の問題を指摘する向きもある。すなわち、都道府県や市町村といった地域レベルにおいては、障害者スポーツ競技大会への参加資格をできるだけ広げ、障害の程度の軽い人々の参加を促すことが重要という見方があることである。事実米国などでは、地域と国レベルでは競技大会への参加資格が異なり、国レベルになると、障害の程度の設定がより厳しくなり、それだけ「競技性」が重視されるが、地域レベルでは参加重視の観点から、基準が厳しくないと言われる（Stewart, 1991, p.22）。

4. デフスポーツ活動における困難とその克服

スポーツ活動においては通常、スタートの合図や審判の警告、さらには選手同士の連携などが音声で行われる。しかし、聴覚障害者にとっては、こうした音声によるコミュニケーションに困難があるため、競技によっては困難が生じる。どのような困難があるか、また、それにどのように対応しているかについて、スポーツ報道を中心に、競技別に調べた結果は次のとおりである（小倉，2019，p.27-29）。

陸上競技

- ・指導者の指示が聞きとりづらいこと。ライバルの足音や息遣いが聞こえないため、距離感がつかみづらいこと（『朝日新聞』2017年7月11日石川全県朝刊）。
- ・健常者は足音でリズムをつかむが、聴覚障害者はそれがなく、リズムをつかみ難い（『朝日新聞』2017年7月14日茨城1地方朝刊）。
- ・リレーでは声や足音をたよりに走者間のバトンタッチを行えないので、あらかじめ

走者の歩幅を計測し、その時点を確認して走りだす工夫をする（『朝日新聞』2017年7月31日東京朝刊）。

- ・スタートの合図は、ランプで知らせるようになっている（『朝日新聞』2017年7月28日東京夕刊）。

水泳競技

- ・スタート時のピストルの合図の代わりに、選手のスタート位置にランプを置き、光でスタートを知らせるように工夫されている（中島・天野，2019，p.7）。

サッカー

- ・選手は大きな身振りでパスを要求したり手話を使ってプレーする。また監督は、ボードに文字を書いて指示を出す（『読売新聞』2018年6月13日西部朝刊）。
- ・通常の2，3倍周りを見ないといけない（『読売新聞』2022年4月20日東京夕刊）。
- ・審判は笛に加えて旗をふる（『読売新聞』2021年2月25日大阪朝刊）（『朝日新聞』2017年7月28日東京夕刊）。
- ・選手はお互いの目を見て確認しあう（『朝日新聞』2017年7月8日ちば首都圏1地方朝刊）。

バレーボール

- ・審判は笛などの音声を光や旗などを使って可視化している。また選手はアイコンタクトや小さなサインを使って意志疎通をはかる（『読売新聞』2022年4月20日東京朝刊）。
- ・スパイクやサーブの音で球の威力を予測したり、ボールを誰がとるかを声で確認したりできないという困難がある（『朝日新聞』2017年7月27日東京朝刊）。
- ・初めのうちは聞き取ろうと集中しすぎて頭痛をおこした。（慣れてきてから）相手の動きや振りに目を凝らすことにより、音に頼ってスパイクの強さを判断できない点を補っている（『朝日新聞』2017年7月29日東京朝刊）。

バスケットボール

- ・音だけでなく、審判は旗を振って指示をだす（『朝日新聞』2019年1月11日佐賀全県朝刊）。
- ・ホイッスルの音がした場合には、視覚的に分かりやすく多くの選手の視界に頻繁に入るゴールバックボードにLEDランプを配置することで、わかりやすくしている

(中島・天野, 2019, p.7)。

- ・審判は「待て」と告げるのではなく、選手の肩をたたく（『読売新聞』2022年7月6日）東京朝刊）。

テニス

- ・打球音は次のプレーのための重要な情報だが、最初は感覚がつかめず戸惑ったが、その分ボールをよく見るようになった（世界デフテニス選手権大会のメダリスト菰方里菜選手の言葉）（『読売新聞』2021年1月11日中部朝刊）。

自転車競技

- ・ギアチェンジやペダルを踏み込む際の音、背後からくる選手の息遣いなど健常者のトップ選手達はかけひきの判断材料にしているが、ろうあ者はこれができない不利がある（トルコ大会のクロスカントリーの銅メダリスト早瀬久美選手の言葉）（『読売新聞』2021年9月5日東京朝刊）。

ボート

- ・「こぎ出す」「ストップ」「前を見る」など9つのハンドサインを考えて実行（琵琶湖のレガッタに出場したろうあ学校の教諭の言葉。なおデフリンピックにはボート競技はない）（『朝日新聞』2022年5月19日大阪朝刊）。

ボブスレー（2人あるいは4人乗り）

- ・同乗の選手とタイミングを合わせるのに、普通は声でおこなうが、聴覚障害があるので、普段から唇やしぐさでカバーしている（チェコのヤブク・ノセク選手の言葉）（『朝日新聞』2022年2月21日東京朝刊）。

カーリング

- ・あらかじめチーム内で決めたハンドサインでスキップが指示を出し、スウィーパーがそれをみながら動く（『朝日新聞』2019年12月17日朝刊）。

ハンマー投げ

- ・森本選手は、五輪選手の室伏氏のやり方を学ぶため、室伏選手の映像を作成してもらい、スピーカーに手を触れて振動によってリズム感覚をつかむ練習をした（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

ゴルフ

ゴルフについては、競技団体の「日本デフゴルフ協会」が、自らのHPに次のように「ゴルフする時のハンディ」として聴覚障害者の困難を列挙している。

- ・風の音が聞こえない
- ・スイング，ショットの音が聞こえない（ショットの音が8種類あると聞いたが分からない）
- ・林，池に当たった音も聞こえない
- ・同伴者が健常者の場合，コミュニケーションがうまくとれないことがある
- ・ゴルフ場からのお知らせなどのマイクが聞こえないために健常者より気が付くのがかなり遅い
- ・周りの雑音も聞こえない
- ・グリーンの上でパターを打つとき，音でなく手で感覚を頼りにするため，グリーンの速さはどの位あるか掴みにくい

5. デフリンピックの歴史と現状

（1）デフリンピックの歴史（小倉，2018，p.1-2）

デフリンピックの原点は，1924年，折からパリで開催されていたオリンピックをめぐる社会的関心の高まりを活用して，ろう者のためのスポーツ大会を開催しようと，同じ時にパリで開かれた国際静寂大会（Jeux internationaux silencieux，英語では The International Silent Games）にあるとされている（アモンズ，2008）。

この大会は，自らもろう者であり，「ろうあのクーベルタン」とも呼ばれるフランス人 Eugène Rubens-Alcais（ユジェス・リュバン＝アルケ）の主導のもとに行われた。アルケは1884年生まれで，熱病のため幼児期にろう者となった。優秀な成績でフランスの特別支援学校（視覚，聴覚障がい者専門学校）を卒業後，自動車修理工として働きながら，20歳の時『Le Sportsman Silencieux（無声スポーツマン）』という名前の雑誌を創刊，続いて1918年，la Fédération Sportive des Sourds de France（略称 FSSF，フランスろう者スポーツ連合）を創設した（Cabanel & Encrevé, 2015, p.34）。この背景には，もともと，健聴者とろう者が一緒になり，レスリング，ボクシング，体操競技などが行われていたことと，1890年代以降フランスを中心とする自転車競技においてろう者の参加が始まったことなどが影響していたと考えられる。

現に，1891年，5人の若いろう者が自転車の100キロメートル競技に参加し，その中

の一人は、シャンパンの銘柄の一つとして著名なメルスイエ (Mercier) 家出身の青年アンリ・メルスイエ (Henri Mercier) で、彼は健聴者も含む60人の参加者のうちトップの成績を取めたという (Séguillon, 2002, p.121, 132)。

FSSF の目的は、(イ) フランスにおけるろう者のスポーツ活動の振興と統制、(ロ) 戸外での体育活動の強化、(ハ) 中央では実現できていない、スポーツ団体の統合促進のための基礎作り、(ニ) 全てのろう者のスポーツ団体間の関係強化にあったと言われる (Cabanel & Encrevé, 2015, p.34)。

以上の歴史に見るように、デフリンピックの場合、競技大会を開催する以前からろう者のスポーツ団体が活動しており、そうした活動に一層の弾みをつけるために国際大会が開催されたのであって、パラリンピックのように競技大会の開催がまずあり、障がい者スポーツ組織の整備は、大会開催と運営を円滑にするために、むしろ大会の後に促進されたものとは、歴史的事情を若干異にしていることに注目する必要がある。

また、デフリンピックの発展の背景には、フランスにおける手話に関する規則の問題がからんでいたことに注意する必要がある。

もともと、フランスでは、1880年以来、ろう者の教育に手話を用いることが実質的に禁止されていた。これは、フランス語を学ぶことをもって、フランス人たる重要な条件にするというフランスの言語政策の影響もあったと考えられる。いいかえれば、ろう者もできるだけ健聴者と同じようになることが求められていたといえる。そうした環境の中で、ろう者は、できるだけ健聴者と同じように活動できることを示そうとして、スポーツ活動を促進するとともに、そこでは、手話を用いてろう者の一体感を醸成するという方向に向かったのであった。

なお、当時フランスにおいても、ろう者に対するスポーツ界での差別待遇があったと言われる。たとえば、1917-18年のシーズンで、フランスのサッカーリーグ協会はろう者のサッカーチームの得点を実際より低くつけ、健聴者のチームを常に上位にのせ、ろう者のチームを最下位にランク付けていたという (Séguillon, 2002, p.122)。こうした「差別」の存在も、逆に、ろう者のスポーツ組織の整備につながったと考えられよう。

1924年5月4日から7月27日まで、折りからパリで五輪大会が開かれたのを契機として、第1回デフリンピックが、同年8月12日から17日まで、国際静寂大会という名前で開催された。大会には、8ヶ国、140人の選手が参加し、5競技(水泳、サッカー、射撃、自転車、陸上)が行われ、また、テニスの模範競技(エキシビション)も行われた (Séguillon, 2002, p.122)。

競技が行われた場所は、次の通りだったとされている (Séguillon, 2002, p.123-4)。ただし、サッカーについては記述がない。

表2 第1回デフリンピック大会競技会場

競技名	会場
陸上競技	ポア・ド・ヴァンサンヌのパーシングスタジアム (Stade Pershing)
水泳	トゥレル (Tourelles) の水泳場
サイクリング	屋内：ヴァンサンヌのヴェロドローム (Vincenne Velodrome) 屋外：パリの東部地区
射撃	ヴァンサンヌの射撃場

大会は五輪大会を踏襲し、選手宣誓や国家斉唱（手話による）等が行われた。

なお、この大会においては、ろう者が、健聴者と同じように行動していることが、ことさら誇示された。たとえば、陸上競技において、スタートは通常の競技のようにピストルの合図で行われ、選手は、ピストルの引き金を見つめて出走したという。また、この大会後、英国および他の参加国の代表は、無名戦士の墓に詣で、第一次大戦での犠牲者を悼んだという (Séguillon, 2002, p.123-4)。

ちなみに、この大会では、一部の競技（たとえば、棒高跳びや400メートル障害）では、数人しか参加選手がおらず、盛り上がりには欠ける競技もあったという (Séguillon, 2002, p.123-4)。

なお、オリンピック大会と異なり（注2）、1924年のろう者の最初の国際競技大会であるパリ大会では、数人の女性ろう者が水泳競技に参加しており、この背景には、女性のろう者は、女性としてのアイデンティティもさることながら、ろう者としてのアイデンティティが強かったため、という見方もある。また、いずれにせよ、ろう者の連帯を強めるという意識が関係者に強かったことが影響していたとみる見方もある。

1924年の大会を契機として、Le Comité International des Sports Silencieux（略称 CISS, 国際サイレント・スポーツ委員会）が創設されたが、この創設には、アルケの他、ろう者としてはベルギーで最初の大学学位取得者であり、また、1924年の大会で、銅メダル（テニス）を得た Antoine Dresse（アントワヌ・ドレス）の協力が大きかったとされている（注3）。

なお、アルケは、単にろう者のスポーツ活動の促進に貢献したのみならず、自分が卒業した特別支援学校の卒業生の団体などを通じて、フランスにおける手話の普及に大きく貢献したと言われている (Cabanel & Encrevé, 2015, p.35)。

The International Silent Games は、1969年のベルグラー大会を機に、The World Games for the Deaf（世界ろう者競技大会）と名前を変え、さらに、2001年のローマ大

会以降は、The Deaflympics（デフリンピック）と呼ばれるようになった。

また、冬季大会は、1949年にオーストリアのゼーフェルドで The International Winter Games for the Deaf（国際ろう者冬季競技大会）として開催されたのが最初であり、1971年のアーデルボーデン（スイス）大会以降 The World Winter Games for the Deaf（世界ろう者冬季競技大会）との呼称が定着し、さらに2003年のスウェーデンのソットバル大会以降冬季デフリンピック競技大会と呼ばれるようになった。

（２）デフリンピックへの参加資格

デフリンピック大会への参加資格は、聴覚障害者で、両耳のうち良い方の耳の聴力が55dB（デシベル）以上の者に限られる。デシベルとは聴力の尺度である。すなわち、人間の耳の感度は、音の強さ（音圧）と周波数によって異なるが、音圧の範囲は極めて広く、桁数が大きくなるため、便宜上、音圧比の対数を取り、それをデシベルとして、聞こえる（音を認識できる）程度の尺度としたものである（城間・鈴木・小淵，2021，p.31）。デシベルは数値が高いほど、聴力が弱いことを示しており、話し声を聴き分ける程度とマッチングさせると、ほぼ次のようになるとされている（城間・鈴木・小淵，2021，p.9）。

表３ 難聴の程度分類

難聴の程度	WHO	聞こえの障害状況	推奨	日本聴覚医学会 (2014)	聞こえの障害状況
正常聴力 (normal hearing)	25dB以下	囁き声を聞き取れる	特になし	25dB 未満	特になし
軽度難聴 (slight impairment, mild hearing loss)	26dB～40dB	1 mでの普通の話声を聞き取れる	カウンセリング、補聴器装用の可能性	25dB 以上 40dB 未満	小さな声や騒音下での会話の聞き間違い、聞き取り困難を自覚する。会議などでの聞き取り改善目的では、補聴器の適応となることもある。
中等度難聴 (moderate impairment /hearing loss)	41dB～60dB	1 mでの大声を復唱できる	補聴器装用	40dB 以上 70dB 未満	普通の大きさの声の会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。補聴器のよい適応となる。
高度難聴 (severe impairment/ hearing loss)	61dB～80dB	耳元での叫び声を数語聞き取れる	補聴器＋読話指導	70dB 以上 90dB 未満	非常に大きい声か補聴器を用いないと会話がかた聞こえない。しかし、聞こえても聞き取りには限界がある。
重度難聴 (profound impairment/hearing loss including deafness)	81dB 以上	叫び声でも理解できない	補聴器＋読話指導＋手話	90dB 以上	補聴器でも聞き取れないことが多い。人工内耳の装用が考慮される。

出展：城間・鈴木・小淵（2021）『聴覚障害学』p.9。WHOと日本聴覚医学会が示す難聴の程度分類をもとに作成

この基準については、デフリンピックは高度な競技大会であることから、競争条件をできるだけフェアなものとするべきであり、まったく聞こえない人々を中心とするべきであるとして、参加基準のデシベル値を引き上げるべしとの意見（たとえば、70dB への引き上げ）もあると言われる。他方、そのようにすると、大会に参加できるろう者の数は減少するであろう。そうすれば、多くのろう者が国際的に交流できる機会も減ることとなり望ましくないという意見もあり、課題として残されている（Stewart, 1991, p.23）。
(4)

また、デフリンピックにおいては、補聴器の使用は認められていない。これには、補聴器が運動中に壊れるおそれがあるという理由もさることながら、選手の競争条件を画一化するという概念のためとされている。

しかしながら、その根底には、さらに深い考え方が潜んでいる（小倉, 2018, p.7）。すなわち、補聴器は、ろう者を、できるだけ健常者に近づけるための用具でありまた、補聴器によっても十分聴覚機能を改善できない障がい者も存在する以上、補聴器はいわばろう者が「聴者の世界に順応していることを示す象徴的意味合いを持っている」（砂田, 1996, p.153）こととなり、それは結局ろう者の真のアイデンティティを傷つけるものだという概念である。つまるところ、「補聴器が（それを使用する）各人に与える効果はそれぞれ異なり、また予想できないものである以上、競技の上で、その使用を除外することはそれ（除外）がろうであること（deafness）とフェアネスを象徴する行為の一つだからである」とされている（Stewart, 1991, p.25）。

ちなみに、ろうのスポーツ競技者へのアンケート結果によれば、練習時において補聴器を装着している者は25.8%であり、またデフリンピックにおいて補聴器を使用したいという者は全体の24.5%にのぼっている。一方で、補聴器を使用したくないという者（51.7%）にその理由を尋ねると、競争条件の公平性の確保と損傷の危険の回避が、ほぼ同じ程度あげられている（中村, 2009）。

また、デフリンピックにおいては、人工内耳の対外装置は、試合中あるいは競技ゾーンでの使用が禁じられている。他方、体内装置についての規制はないが、格闘技やサッカー、ラグビーなどでは運動中に壊れたりする危険があることなど、医学的見地から注意が呼びかけられている（全日本ろうあ連盟スポーツ委員会, 2017）。

6. デフリンピックを巡る組織的問題

デフリンピックは、第5節で記したように、ろう者の国際的スポーツ大会として、国際サイレント・スポーツ大会という名の下に、国際サイレント・スポーツ委員会によって組織、運営され、そののち、1969年以降世界ろう者競技大会の名前にかわり、さらに、2001年以降デフリンピック大会となり、デフリンピック委員会の下に開催されてきた。

しかし、その過程において、障害者の国際スポーツ大会であるパラリンピックとの関係をどうするかが問題となった。

デフリンピックの組織とパラリンピックの組織が、公式に関係を持つようになったきっかけは以下のとおりである（小倉，2018，p.4-5）。

1980年代に、パラリンピック大会（正確には、パラリンピックの前身である国際ストーク・マンデビル大会）の開催を円滑に行うために設けられた International Coordinating Committee Sports for the Disabled in the World (略称 ICC, 障がい者スポーツのための国際調整委員会, IPC = 国際パラリンピック委員会のいわば前身である機関)において、パラリンピックをさらに発展させるために必要であるとの認識から、IOCに類似した IPC を設立すべく、その準備のための特別委員会が設置され、その委員会への CISS の参加問題が発生したことにあると言って良い（及川，1998，p.50）。

言い換えれば、1989年のニュージールランド、クライストチャーチ大会において、デフリンピックの会場に初めてオリンピック旗が掲げられたことに象徴されるように（Bailey, 2008, p.94-95）、1980年代において、パラリンピックとオリンピックの関係についての議論が高まり、その過程で、いわばもう一つの障がい者スポーツ国際総合競技大会であるデフリンピックとの関係をどうするかが問題となったのである。

具体的には、デフリンピック関係者として、CISS の委員長 Jerald M. Jordan（ジェラルド・M・ジョーダン）が ICC に参加する形で、デフリンピックとパラリンピックの関係調整が行われることとなった。

しかしながら、CISS の ICC 正式参加には、いくつかの問題あるいは障害があった。一つには、CISS の独自の歴史的ステータスである。ICC としては、IOC とできる限り対等に渡り合うためにも、ICC がろう者も含めた障がい者スポーツ競技全体の調整役である形を取りたかったのに対して、CISS 側は、自己の存在意義をできるだけ高めるためにも、独自に IOC と協議することに固執したのであった（Bailey, 2008, p.71）。また、財政上の問題もあった。例えば、ICC 関連会議における手話通訳にかかる費用を、CISS 側ではなく ICC 側が負担すべきとする CISS 側の考え方に、ICC 側としては賛同

できなかった。

この手話通訳の費用負担の問題は、単なる通訳費用の分担という財政的問題に止まっているのではないことに注意を要する。すなわち、ろう者側から見れば、そもそも手話通訳が必要なのはろう者ではなく、健聴者であるという考え方が根底にある（及川，1998，p.52）。言い換えれば、手話通訳を提供するのは障がい者のために行う福祉事業ではなく、社会全体が当然用意すべき義務なのだという考え方である。この考え方によれば、通訳費用を負担すべき者は、当然 CISS 側ではなく、ICC あるいは IPC 側となるのである。

その他、デフリンピックの開催年次とパラリンピックの開催年次には、ずれがあり、これを調整しなければならないという問題もあったと考えられ、また、そもそも聴覚障がい者はオリンピック大会に出場可能であり、現に前述のように、何人かの聴覚障がい者は五輪においてメダリストになっていたという背景も、聴覚障がい者は他の身体障がい者とは別であるとの議論を生む理由の一つとなっていたとみられる。

こうした事情あるいは背景によって、結局、CISS 関係者と ICC 及び IPC 関係者との間の意見の隔たりは埋まることなく、1990年に両者の間で、デフリンピックはパラリンピックとは独自に大会を行うこと、各国のろう者スポーツ団体の自主性を尊重することなどを織り込んだ協定が取り交わされたのであった（及川，1998，p.51）。このように、両者が合意に至らなかった背後には、いくつかの事情ないし要因が絡んでいたとみられる。ICC の中で、新しいメンバーたる CISS 関係者や知的障がい者競技連盟関係者は、パラリンピック関係事項について投票権を持つべきではないと言う議論が強かったことも一因として挙げられる（Bailey, 2008, p.75-76）。また、ICC の委員長には CISS 関係者は任命されないという問題もあった（Bailey, 2008, p.82）。つまるところ、CISS 側から見ると、ICC のメンバーになれば、会議出席のための旅費や手話通訳の費用など、財政的負担が増える一方、メンバーになったことから生ずるメリットは取り立ててないという結論になったとみられる。その後、デフリンピックとパラリンピックとの協力関係は冷却化し、1989年に IPC が正式に発足した6年後、1995年に、CISS は正式に IPC のメンバーシップから離脱したのであった。

7. デフリンピック関連競技団体の実態

我が国におけるデフリンピック関連競技団体として、ろうあ連盟スポーツ委員会のウェブサイトに掲載されている団体は、24団体にのぼる。（表4参照）

表4 デフリンピック関連競技団体

一般社団法人日本デフ陸上競技協会
一般社団法人日本デフバドミントン協会
特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会
一般社団法人日本デフビーチバレーボール協会
一般社団法人日本デフボウリング協会
一般社団法人日本ろう自転車競技協会
一般社団法人日本ろう者サッカー協会
特定非営利活動法人日本デフゴルフ協会
一般社団法人日本ろう空手道協会
日本デフオリエンテーリング協会
一般社団法人日本ろう者スキー協会
ジャパン・デフ・アーチェリークラブ
一般社団法人日本ろう野球協会
日本ろう者ソフトボール協会
一般社団法人日本デフ水泳協会
一般社団法人日本ろうあ卓球協会
一般社団法人日本ろう者テニス協会
一般社団法人日本デフバレーボール協会
特定非営利活動法人全日本聴覚障害スキー指導員会
一般社団法人日本デフサーフィン連盟
特定非営利活動法人日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟
一般社団法人日本ろう者柔道協会
一般社団法人日本デフセーリング協会
日本ろう者ライフル射撃協会
公益財団法人日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会

ろうあ連盟スポーツ委員会 HP, <https://www.jfd.or.jp/sc/sportsassoc> (2025年4月22日閲覧)

(1) 名称

これらの団体の名称については、「ろう」「ろう者」「ろうあ者」といった表現を用いているものが約半数、「デフ」という表現を用いているものが約半数をしめている。

なお、デフリンピック大会競技種目の団体ではないが、ろう者の日本ラグビーフット

ボール連盟は、「日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟」という名称を使っている。

（２）法的な資格

表４の団体の法的資格は、社団法人がほとんどで、特定非営利活動法人は、二団体にとどまっている。ただし、デフリンピックの競技で、日本に関連競技団体が存在しないものもいくつか存在する（たとえば、オリエンテーリング、テコンドー、レスリングなど）。

（３）事業内容

事業内容は、いずれも、競技の普及、振興を一つの柱とし、同時に、競技能力の向上も柱とするものが殆どである。

（４）財政状況

競技団体の財政状況については、収入のうち９割以上を助成金が占める団体が４団体、助成金の割合が収入の半分以下である者が３団体で、助成金依存率の平均はおよそ７４％前後に上っている。

（５）役員構成

団体のトップの責任者がろう者である団体がデフリンピック関連団体の大半を占めているが、健聴者が代表である団体もいくつかみられる（なお、HPなどの情報がインターネット上では数団体存在する）。

（６）健常者国体との結合、連帯

一部のろう者競技団体は、財政的、人的理由などから、健常者団体の傘の下に、いわば、その一部分として組織されているものもある。たとえば、デフハンドボール競技団体は、ハンドボール協会の中にデフハンドボール委員会という形で存在している。

８．デフリンピックにおけるコミュニケーションの問題

デフリンピックではろう者同士、あるいはろう者と健聴者との間のコミュニケーションのとりかたに問題が生じやすい（小倉，2023，p.52-55）。監督、コーチ、選手同士のコミュニケーションの問題は、競技成績にも影響を与えやすい。とりわけチーム競技で

はこの点が重要であり、たとえば、台北大会のバスケット競技について、この点の指摘があった。また、この問題はチーム競技のみならず、(バドミントン競技シングルスを含む)個人競技においてもみられた(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟, 2010, p.65-66)。こうした、コミュニケーションの問題は、選手間や選手と監督との間だけではなく、審判、医師などとの間、あるいは大会組織委員会による説明においても生ずることがある(日本障害者スポーツ協会・財団法人全日本ろうあ連盟, 2010, p.31,55)。また、PR活動の一環として競技場外のマスコミ関係者などとの接触の際には、手話通訳、音声通訳などが三重四重に介在することがあり(全日本ろうあ連盟, 2018, p.45)、そうした状況への対処をあらかじめ考えておく必要がある。

なお、審判や選手同士のコミュニケーションの問題がいかに試合結果に影響するかの点について、ソフィア大会のバスケットボール女子チームのヘッドコーチによる以下のような指摘は、傾聴に値しよう。

審判のコールについて、デフバスケットボールは敵味方の声など、音声による情報が遮断されるため、背後など死角での接触がどうしても多くなります。死角での接触に対するコールが多くなったことで、審判自身の心理面において、疑わしい場面では笛を吹きやすい雰囲気が全体にありました。そして近代バスケットボールはパワープレーが重要視されてきており、オフェンスに有利なルールとなっているため、ディフェンス側は対応策としてファウル数を計算しながらあえてファウルをする状況も生まれています。審判はゲームをコントロールするため、被ファウル側が不利になるコールはしないなどの対応をしており、今回は言語の壁(健聴者、ろう者:手話、音声英語、音声ブルガリア語など)によってその対応にばらつきが生じてしまっていたと推測されます。さらに接触転倒については、日本国内ならばチャージングを取る場面でも、デフリンピック期間中においては、転倒の原因となった動作がオフェンス側にあるのかディフェンス側にあるのかが体格差によって隠されてしまい、故意による接触なのか、そうでないのが判断しづかったため、総じて日本は審判のコールに対して不利でした。我々は、今までの国際大会の経験から「審判のコールに必要以上に神経質にならない」よう、選手に周知し、納得のいかないコールに対しても冷静にアジャストするよう求めてきましたが、今後も国際大会においては、被ファウルについても含め、国際試合における審判へのアジャストも強化のテーマとして重要になってくると考えられます(一般財団法人全日本ろうあ連盟, 2014, p.62)。

ちなみに、我が国において、監督、コーチなどのデフリンピック関連指導スタッフに占めるろう者の割合は約2割と言われる（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター，2009，p.27）。

デフリンピックにおけるコミュニケーションの問題は、手話通訳者に関連するものも多い。手話通訳者の数の不足の他（日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟，2010，p.39），しばしば指摘される点として、業務分担の問題がある。すなわち、手話通訳者が通訳業務以外に食料の調達、英訳業務の手伝い、連絡事務などを引き受けることの可否とその程度態様の問題である（日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟，2010，p.82,122；一般財団法人全日本ろうあ連盟，2014，p.108；全日本ろうあ連盟，2018，p.93）。この問題は、手話通訳者が通訳以外の仕事をするのはあくまでボランティア活動であるとみなすか、あるいは、そもそも手話通訳者は、通訳であると同時に大会業務のため派遣されたスタッフの一員であると認識すべきかという問題でもあるといえる（全日本ろうあ連盟，2018，p.115）。この点に関連して、ある手話通訳者は次のような指摘を行っている（全日本ろうあ連盟，2018，p.23-95）。

職務は手話通訳ですが、（以下の業務に従事したことに見られるように）チームスタッフとしての役割比重が大きかったように感じます。

○手話通訳としてのコミュニケーション確保

- ・チーム内（練習，試合，ミーティング）
- ・その他（他競技選手スタッフ，旅行会社，於成田空港）
- ・報道関係インタビュー

○チームスタッフとして

- ・メデイカルスタッフとの連携
- ・本部との連携
- ・補食の調達
- ・練習時の球拾い
- ・TD 会議出席

この問題は、また、手話通訳者にどこまでの専門性を要求するかの点とも関連している。ある通訳者は、次のように、人材育成の必要性を強調しているが、そうした方向をとるためには、通訳業務と他の業務とのきっちりとした仕分けがなされねばならないで

あろう。

やはり専門性を持った通訳者の育成が課題だと思います。デフスポーツにおける通訳者には、手話通訳の技術の他にも、競技に関する知識、長期の帯同に耐えうる体力、選手のメンタルに寄り添える人間力など幅広い力が求められます。今回はチームに国際手話ができる選手がいたので助けられましたが、競技に集中してもらうためには、やはり英語や国際手話が堪能なスタッフも必要です（全日本ろうあ連盟, 2018, p.67）。

この点とも関連して、各競技団体が派遣する通訳と、本部が派遣する通訳との業務分担が必ずしも明確ではないとの指摘にも留意すべきである（全日本ろうあ連盟, 2018, p.83）。

他方、通訳者の仕事が円滑に行われるよう、器具の整備も必要であろう。すなわち、手話通訳者がハンズフリーになるように携帯電話用のイヤホンを提供することや（全日本ろうあ連盟, 2014, p.117）、本部や外部との連絡には、人によっては音声変換ソフトを活用すること等が考えられる。

なお、手話通訳者については、試合中の通訳者の居場所についてのルールが統一されていないことによる不便を指摘する声も挙がっている（全日本ろうあ連盟, 2014, p.117, 123）。

手話通訳の問題にかぎらず、デフリンピックにおいては、開催地の母国語、英語、日本語、開催地の手話、国際手話、日本手話の間の通訳といった複雑な状況を呈することが当然予想されるが、実際の例として、次のようなケースが報告されている。

男子200mで山田真樹選手が、金メダルを獲得した際、トルコのテレビ局の方が山田真樹選手のお父様にインタビューをしたいという申し出がありました。その際、トルコ語（トルコテレビの方）→国際手話（トルコ人スタッフ）→日本手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→音声通訳（三坂）→山田父。日本語（山田父）→日本手話（三坂）→国際手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→トルコ語（トルコ人スタッフ）→トルコテレビ、という流れで、通訳をさせていただきました。この経験は大変貴重なものでした。それと同時に簡単な挨拶だけではなく、今後は国際手話も覚えていきたいと思うようになりました。

大きなトラブルはなかったものの、選手にとって大会に集中でき、不快感のない良い環境作りができたのか、もっとできた事があったのではないかと反省が残ります。

す（全日本ろうあ連盟，2018， p.45）。

なお，サムスン大会において，手話通訳に関連して次のような特別の配慮がなされたことが報告されている。すなわち，「日本選手団が利用したトルコ航空には，手話言語ができる客室乗務員が搭乗し，手話による機内ビデオも用意されていた」こと，そして，大会出場には「テレビ電話システムを用いて国際手話通訳と24時間いつでもやりとりができる仕組み」が設けられていたことである（東京都オリンピック・パラリンピック準備局，2020， p.40）。

9. デフリンピックにおける財政的問題

デフリンピック大会への準備及び実際の参加をめぐる，その費用に関する個人負担の問題については多くの選手，関係者によって指摘されている（小倉，2023， p.57-60）。デフリンピック報告書では，一般的な問題提起のほか，具体的な個人負担の費用項目への言及もある。たとえば，合宿費の負担，渡航費，国際大会への参加費などが挙げられている（日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟，2010；全日本ろうあ連盟，2014；全日本ろうあ連盟，2018）。選手候補も含め，デフスポーツ選手151名へのアンケート調査（2009年）によれば合宿費や遠征費用については8割が自己負担となっており，年間の自己負担費用が50万円を超える者は，回答した者のうちの約4割に上っていると言われる（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター，2009， p.25-26）。

この問題は，選手の参加辞退にも波及する深刻な問題であるとの指摘（たとえば，陸上競技の選手から「メダル獲得射程内でも，経済的状況により辞退する選手も何人かいた」との指摘）もある（一全日本ろうあ連盟，2014， p.49）。また，ビーチバレーの監督は，「出場できたとしても全額自己負担というのは決定事項であり，費用の工面や会社への休暇申請など非常に行動しにくい状況が長く続きました」と記している（全日本ろうあ連盟，2014， p.69）。

個人負担の問題の影響は選手のみならず，コーチなどにも及んでおり，陸上競技のコーチは次のような苦境を述べている。

8年ぶりのコーチでしたが，ギリギリまで投てきコーチがいなかった点に疑問を感じました。三枝監督とは年賀状やメールなどで進絡はとりあっていたものの，大会が迫った中で私に依頼があったことを考えると，コーチがなぜ決まらなかったのかと感じました。投てきがある程度でき，手話もできる人物が本当にいないのだろ

うか。そういう人物は存在するとは思うが何故決まらなかったのか、それは『お金』の問題であるかと思います。大会前に返ってくるともわからない30万円近くの大金をなぜコーチが支払う必要があるのでしょうか。この状態は普通ではありません。このことがコーチ就任を足踏みさせる原因なのだと思います。大会前の合同合宿の往復の旅費においても、連盟などが事前に資金を準備したり、合宿中に返金するなどの措置が必要です。選手にしても同じ事が言えると思います。日本代表レベルの選手達がなぜ50万円近くのお金を払って出場しなければならないのか甚だ疑問です。資金面を連盟や国がしっかりと管理し、免除する方向に持って行かない限り、今後は選手ほか（ママ）コーチを快く引き受ける者はいなくなると考えられます（全日本ろうあ連盟，2018，p.42）。

こうした状況の解決策としては、競技関係団体の努力、スポンサーの獲得などへの言及もみられるが、特定の解決策として、派遣費用の自己負担のありかたにつき「メダルが獲得可能なレベルの者は自己負担なし，8位入賞以上のレベルの者は半額自己負担，入賞が厳しいレベルの者は全額自己負担，といったかたちでの制度を整えるべき」との意見も出ている（全日本ろうあ連盟，2018，p.48）。

他方、資金獲得への様々な努力や取り組みは、単に金銭的な自己負担の軽減の為のみならず、その過程を通じて、競技の知名度の向上や選手の意識の向上に役立つとの趣旨の以下の指摘は傾聴すべきであろう。

特に頭を悩ませたのは、資金面での対応です。数少ない資金＋世界選手権の派遣費用やデフリンピックの派遣費用の準備について、日々の合宿計画をしながら、「選手達の負担が少なくなる方法を模索すること」が今思えば、私にとっての大きな課題だったのではないかと今となって思います。また学校や企業への訪問、ポスター・チラシ制作（デザイナー依頼，発注，発送…）など、様々な業務に取り組み、私自身が選手時代にすごく疑問に感じていた広報分野にも取り組み、一定の成果を得た手応えを感じています。実際に、一般の方々の目に触れるところに貼らせていただいたり、寄付金をいただいたり、見学や興味を持ってもらえることが増えました。その結果、選手たちが日本代表という誇り，プライド，憧れの対象となることができたのではと思います（全日本ろうあ連盟，2018，p.106）。

他方、選手やスタッフで自己負担はじめ金銭的問題を云々しすぎる者は、むしろ放置し、チームから自然と脱落させることによって、チーム全体の士気を高めることに活用

したとする次のコメントは、(資金面の困難の程度、態様にもよるが)困難の克服の過程に意味があるという障害者スポーツ特有の価値観と関連しているとみることもできよう。

特にスタッフに関しては「フォアザチーム」「フォアザ選手」で献身的な活動を深く要求しました。前述したように資金面の厳しさや諸事情から、満足に謝礼も払えず、ほとんど善意にゆだねるような状況が続いたことから、名誉欲や金銭的な要求の高い人、規律や指揮系統に関する理解力、協調性のない人間とは結局、袂を分かち結果となりました。これはシビアで厳しい合宿を行ったことによる成果であり、副産物であり、残ったスタッフや新たに登用した臨時も含めたスタッフにもいい意味での緊張感や、チームに欠けているところを埋めていこうとする積極性と一体感が生まれていきました。予算の少なさから、満足にウェアを支給もできず、いわゆる日本代表なら当然与えられるものという意識とはかけ離れた強化体制で臨まざるを得なかったことを逆手にとり、結束を図っていくことができました。残ったスタッフたちや苦勞した選手たちには感謝の言葉以外ありません。最大限の賛辞を贈りたいと思います(全日本ろうあ連盟, p.102)。

金銭的あるいは財政的問題の一環として、スポンサーの獲得の問題がある。この問題については、一般論としての重要性を指摘したもの(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟, 2010, p.120)、より具体的な改善ポイントに言及した意見もある。たとえばある陸上競技選手は、「日本選手団名簿には都道府県の協会しか記載されていませんが、職場の同僚の支援のおかげで出場している以上、恩返しという意味で会社名や学校名も記載してほしいです」という意見を述べているが(全日本ろうあ連盟, 2014, p.45)、こうした点はスポンサーとの関係でも配慮できる点であろう。

また、報奨金の問題も存在する。諸外国と比べて日本では報奨金がほとんど出ないことへの失望の声もある(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟, 2010, p.31)。そして、報奨金の有無は、単に金銭的負担軽減の問題を超えて、選手のやる気の問題という精神的影響ともつながっているとの指摘もある(全日本ろうあ連盟, 2014, p.26)。さらには、報奨金の有無の問題を、練習時間の確保などについての配慮の問題と同じ次元でとらえる者もいる(全日本ろうあ連盟, 2014, p.31)。

他方、この問題は、全体的な「成功の報酬」と関連しているとして、デフリンピックの知名度、世間の注目の度合いを高めるといった課題も含めた広い次元で考えるべきとの見方もあることに留意すべきであろう(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟,

p.28)。

10. デフリンピックの選手像－報道分析

2025年に東京においてデフリンピック大会が行われることにも鑑み、近年開催されたデフリンピック大会（2017年トルコのサムソン，2021年ブラジルのカシアスドスル両大会）に出場した日本選手についての新聞報道（朝日，毎日，読売の地方版も含めた関連記事および写真）を網羅的に分析し，そこから浮かび上がる選手像（選手についての報道の動向）を次の項目別に取りまとめた（小倉，2024）。すなわち，障害の原因，日常生活上の困難，練習環境などの困難，健常者の選手との関係，競技におけるプレイのやり方やテクニック，知名度およびそれに関連する事柄，自己意識ないしアイデンティティ，報道関係者とのコミュニケーションの態様などである。

（1）障害の原因と態様

パラスポーツの選手報道においては，通常，障害の原因，程度，ならびにいつから障害を持つにいたったかという3点が問われる。

デフリンピック選手報道についても，よくみると，この3点が意識されている場合が多い。しかし，ケースによっては，いつから障害があったかについては明確でない報道もあり，また，全く聞こえないのか，難聴ではあるが補聴器をつけて補完しうる状態なのかなどについて明確ではない報道も少なくない。さらに，稀ではあるが，特定の選手のかかなり長い紹介記事でも，障害の態様について全く言及のないものもある。たとえば，バレーボールの宇賀耶早紀選手のことを報じた，2017年12月9日付『読売新聞』朝刊記事は，記事の表題で「聴覚障害者バレーボール女子」と題してはいるが，記事そのものの中では，同人の障害について一切触れていない。

以下，典型的ケースとも言える記事についてのその報道態様をみると次の通りである。

表5 デフリンピック選手と障害の態様

競技	氏名	態様
水泳	茨 隆太郎	先天性感音性難聴 ¹ 。しかし，同じ新聞（読売）の，同じ選手の紹介記事では，単に「生まれたときから難聴」といった表現で紹介されている記事もある ² 。
バレーボール	尾塚 愛実	生後7ヶ月の検査で，感音性難聴との診断 ³

競技	氏名	態様
バドミントン	柿内 康平	幼い頃からほとんど聞こえない ⁴ 。
水泳	金持 義和	幼い頃の病気が原因で小学一年生から耳が聞こえなくなった ⁵ ，なお病名を髄膜炎と明記した記事もある ⁶ 。
水泳	齋藤 京香	3才のとき両耳が先天性の中程度の難聴と分かる ⁷ 。
陸上	佐々木 琢磨	幼い頃，内耳性難聴になる ⁸ 。なお，「1才のとき」と時期を明示した記事もある ⁹ 。
陸上	設楽 明寿	生まれつき耳が聞こえない ¹⁰ 。
水泳	津田 悠太	大声が聞き取れない重度難聴 ¹¹ ，原因や障害発生の時期については言及なし。
バドミントン	長原 菜奈美	生まれつき聴覚に障害 ¹² 。
自転車	早瀬 久美	生まれつき聞こえない ¹³ 。
水泳	藤原 慧	幼いころ風疹などで高熱を出しその後遺症で耳が不自由になる ¹⁴ 。1才の時と時期は明示してあるが，病名については言及のない記事もある ¹⁵ 。
卓球	山田 萌心	生まれつき難聴 ¹⁶ 。
陸上	湯上 剛輝	先天性聴覚障害 ¹⁷ 。

これらのケースにあるように，デフリンピック大会に出場するような選手たちは，ほとんど，先天性かあるいは幼児時代の病が原因で聴覚障害者となっており，成人あるいは少年少女時代になってから障害を受けたのではない。言い換えれば，健聴者としての体験がほとんどないと言える。したがって，自己のアイデンティティの一つとして，「聴覚障害者である」という点は，極めて自然であり，強いといえよう。また，先天性あるいは幼い時期の病が障害の原因である場合がほとんどであることは，障害の原因に，戦争，産業災害，自然災害，交通事故といった，社会性を帯びた事情がからんでいないことを意味しており，この点，パラリンピックに出場する選手と境遇の違いがみてとれる。

他方，多くの聴覚障害の選手は，普段の生活では補聴器を使用しているケースも少なくなく，補聴器を外すことが要求されるデフリンピック競技は，ある意味では，特別のルールを決めた新しいスポーツであるともいえる。このことは，後述するように，デフリンピック出場選手の中でも，かなりの選手は，健常者の競技大会への出場を目指していることとも関連しているといえよう。

(2) 日常生活上の困難

デフリンピック選手についての報道には、時として、聴覚障害者として、日常生活上、どういう困難を体験しているかについて言及しているものがある。とりわけ、健常者とのコミュニケーションの困難について触れたものも散見される。たとえば、陸上の山田真樹選手は、大学時代、当初は「補聴器をつけても多人数だと話が聞きとれなかった。周りが笑うと、その理由がわからず、自分もぎごちない笑顔を作った。パントマイムで習った全身表現や手話で思いを伝えるようにした」と述べている（『朝日新聞』2017年7月30日朝刊）。同じような体験は、水泳の茨隆太郎選手によっても言及されており、相手の口の動きを読む「口話」も多人数になると通用せず、「わかったふりをして数々のトラブルを起こした」という（『朝日新聞』2017年7月27日夕刊）。

また、健常者と一緒に練習や競技を行うと、「スタートのピストルの音が聞こえないため、他の選手の反応を感じてカバーするなどの苦労がある」という者もいる（『読売新聞』2017年7月13日夕刊）。

加えて、元来、耳は聴覚だけでなく平衡感覚を司るため、陸上の佐々木琢磨選手は、コーチに「走る際に体のバランスがとれていない」と指摘されたという（『朝日新聞』2019年2月15日宮城朝刊）。同様に、ハードルの高田裕士選手は、コーチから「ハードルを飛ぶまでの走るリズムが大事」と指摘されたが、これも聴覚に障害のある選手の多くは、リズム感を習得するのが苦手なせいであるといわれる（『朝日新聞』2017年7月16日朝刊）。このため、五輪に出場しようとしても、聴覚障害者は、音の問題に加えて、「平衡感覚を司る三半規管にも障害のある選手が多い」ことからくる困難があると言われる（『毎日新聞』2020年11月24日夕刊）。

そもそも、聴覚障害を理由に、学校で運動部に入れてもらえなかったケースや（注5）、職業資格が聴覚障害者には閉ざされていたケース（その後開放された）もある（注6）。こうした事情もあって、選手生活と就業の両立は、聴覚障害者にとって困難を伴うことも稀ではなく、水泳の藤原慧選手も、こうした苦悩を述べている（『読売新聞』2022年5月4日）。

他方、デフリンピック大会に出場する選手たちは、大会では日常生活とはまた違った次元の世界で競技しなければならないので、その落差に戸惑う点にも注意を払う必要があるだろう。

たとえば、水泳の齋藤京香選手は、普段は補聴器をつけて生活しているだけに、初めは、「補聴器を外さねばならない水中は怖かった」と述懐している（『読売新聞』2018年3月15日山形朝刊）。また、女子バレーボールの平岡早百合選手は、普段の練習では補

聴器をつけて行っているが、デフリンピック大会では、初めは「音のない状態が怖くて、聞こえないのに聞き取ろうと集中しすぎて頭が痛くなった」と述べており（『朝日新聞』2017年7月29日朝刊、『朝日新聞』2017年8月8日埼玉朝刊）、一部の難聴者で補聴器を常用している選手にとって、デフリンピックは、日常と違う世界として特別の心理的負担を与えるものであることが示唆されている。

他方、日常生活上では、とにかく「聞こえないこと」は、障害でありハンディキャップと考えられがちであるが、デフリンピックでは、そうともいえないという思いを抱いた選手もいる。たとえば、陸上のリレー競技で金メダルを獲得したチームの一員である佐々木琢磨選手は、練習では、耳が聞こえないだけに、バトンパスの合図を声や足音を頼りに行えないため、歩測と影をたよりに練習したが、健常者の五輪大会でも、音による合図は声援にかき消されて聞こえなかったと知り、「僕たちにもできると思った」と述べている（『朝日新聞』2017年7月31日朝刊）。このことは、「聞こえないこと」が常にハンディキャップとなるわけではないことをあらためて認識せしめたという点で、デフリンピック大会の環境と日常生活との間に違いがあることを示しているともいえよう。また、デフサッカーの東海林直広選手は、デフリンピックでは、普段から身振り手振りでのコミュニケーションに慣れている聴覚障害者は、「言葉が分からない外国人にも、自分たちだからこそ伝えられることがある」という思いを強くしたという（『朝日新聞』2018年12月15日夕刊）。ここでも、日常生活上のハンディキャップが、デフリンピックでは逆にある種の利点に近いものとなっていることが暗示されている。

（3）健聴者との練習、試合をめぐる問題

聴覚障害者のスポーツ活動、とりわけ、選手のスポーツ活動においては、時として、健聴者に混じっての練習や試合が、大きな意味をもつ場合があるが、そこでは、同時に、若干の困難が指摘されている。たとえば、水泳の藤原慧選手は、高校時代に全国大会において1500メートル自由形競泳で5位に入る活躍を示しているが、「スタートもピストルの音が聞こえないため、他の選手の反応を感じてカバーするなどの苦労がある」という（『読売新聞』2017年7月13日夕刊）（注7）。

また、ハンマー投げなどでは、重心を常にハンマーより前に置くことで遠心力を働かせるが、健聴者は、刻々と変化するハンマーの位置を耳も含め五感に頼って確認するが、聴覚障害者はとにかく視覚に頼りすぎ、ずれが生じやすいという困難があるともいわれる（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

なお、自転車の早瀬久美選手は、パラリンピックの自転車競技にボランティアとして参加するなどの体験を通じ、聴覚障害者特有の困難として、次のような点を指摘してい

る。すなわち「自転車競技ではギアチェンジやペダルを踏み込む際の音、背後から迫る選手の息づかいなどを、健常者のトップ選手たちは駆け引きの判断材料としているので、聴覚障害者の不利も大きい」という（『読売新聞』2021年9月5日朝刊）。

こうした「困難」を克服して健聴者と同じ土俵で、練習し試合することは、実は、精神的に障害を克服するという象徴的意味があるともいえる。このことを、藤原慧選手は、次のような言葉で表現している。すなわち「障害を持ってもやれる、ということを証明するために健聴者の中でやってきた」と（『読売新聞』2017年7月13日夕刊、『読売新聞』2017年7月22日朝刊、『毎日新聞』2017年12月8日大阪朝刊）。また、そうした「克服」の過程を、次のような趣旨の体験談として語っているハンマー投げ選手もいる。すなわち「甲子園を目指して健常者が通う学校を受験したが失敗し、失意の中でろうあ学校へ進学、そこでハンマー投げをすすめられ、五輪選手の室伏氏から手話をまじえて指導をうけて意欲を増した」と（『毎日新聞』2013年3月25日滋賀）。

他方、こうした「克服」のシンボルとしての意義を、選手たちがデフリンピック大会出場から常に関心を感じ取るとは限らない。むしろ、同じ聴覚障害者としてのアイデンティティを強め、障害を克服することもさることながら、障害を素直に受け止め、それを自らの特性と考える機会がデフリンピックにあるという見方もある。たとえば、前述の藤原慧選手は、デフリンピックへの参加の印象を次のように語っている。すなわち「ボクはこれまで聞こえなくとも健聴者と一緒にやれることを証明したくてやってきたが、この世界（聾啞者だけの大会）もいいものだなと思った」（『読売新聞』2017年7月26日朝刊）。ここには聴覚障害者自身のアイデンティティにまつわる微妙な問題が暗示されているともいえよう。

（４）競技場での特有の困難とその克服

障害者スポーツのみならず、多くのスポーツ報道においては、勝利の原因や、選手の作戦などについての論評が多い。聴覚障害者の競技活動、とりわけデフリンピックの如く高度の競技性を有する大会においては、各種の競技活動の上で、聴覚障害がどのような困難を惹起し、それに競技者がどのように対処しているか（ピストルに代わるスタート方法や、笛に代わる旗の使用といった審判や競技ルールに関連するコミュニケーションの問題を越えて、競技そのものの能力、技能の発揮のための工夫如何）については、十分な説明や報道が行われているとは言い難い。

競技場での特有の困難とその克服に関する数少ない報道の中には次のような例がある。

女子バレーボールについて、聴覚障害があるだけに、構えと視線が一層重視されると

の指摘がある（『読売新聞』2017年3月31日神奈川朝刊）。

また、陸上競技のリレーにおいて、前の走者の影を見ながらバトンパスの仕方を工夫した、あるいは、前の走者がどこまで来たら次が走り出すか、チームでは、各走者が走り出す地点から逆方向にシューズ一足分ずつ距離を測る「歩測」で決めるといった工夫がされているという論評もある（『朝日新聞』2017年7月31日朝刊）。

また、ハンマー投げの森本選手は、前述のように、五輪選手の室伏氏のやり方を学ぶため、室伏選手の映像を作成してもらい、スピーカーに手を触れて振動によってリズム感覚をつかむ練習をしたという（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

いずれにしても、こうした聴覚障害者特有のプレイの工夫や練習方法についての解説は、いまだ十分とはいえず、聴覚障害者のスポーツ大会の「魅力」の発信には、こうした点の考慮もさらに必要と思われる。

（５）知名度の問題

選手、関係者を問わず、デフリンピックについて、ほぼ例外なく言われる論議あるいは訴えは、知名度が低いという点である。

こうした知名度の低さにどう対処すべきかについては、選手自身によって各自の意見が述べられている。

なんといっても、情報発信が大事であるというもっともな意見もある（注８）。さらにそうした「情報発信」の具体策として、陸上の佐々木琢磨選手は、デフスポーツを広めてゆくことが自分の使命であるとして、講演や陸上教室などに従事している（『読売新聞』2023年8月2日夕刊、『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊）。

しかし、選手によっては、何よりも成果を出し、立派な記録を残し、できればメダルを獲得することが、知名度をあげる最大の要因だと見る者もいる（『読売新聞』2022年8月13日岩手朝刊、『読売新聞』2016年6月11日朝刊、『朝日新聞』2018年1月24日兵庫朝刊、『朝日新聞』2021年11月12日青森朝刊）。また、競技の魅力を伝える努力が必要という見方を強調する関係者もいる（『朝日新聞』2019年2月18日神奈川朝刊）。

知名度向上との関連では、通常、より知名度の高い健常者と混じって試合に出場することが、聴覚障害のある選手の知名度向上にも役立つと見る選手も存在する（『読売新聞』2022年5月4日朝刊）。

加えて県や市町村レベルでの褒賞が、選手の知名度、ひいてはデフリンピックの知名度を高めるために役立つことは言うまでもなく、また、聴覚障害者関連団体が主催する講演、選手によるトークショー、グッズ販売などを組み合わせたイベントが、知名度向上に役立つといえよう（注９）。

他方、デフリンピックについての知名度向上が叫ばれる一つの背景として、近年パラリンピックの認知度が上がっているのに対して、同じ障害者スポーツ大会であるにもかかわらず、デフリンピックの認知度が低いことについてこれを遺憾とする感情が高まっていることにも注意を要しよう（『読売新聞』2022年4月27日朝刊、『読売新聞』2016年6月11日朝刊）。

しかしながら、このデフリンピックの知名度の問題は、情報発信、普及活動、PRといった通常の啓発活動において、聴覚障害者自身の発信には限界があることと関連している。すなわち、多数の人々を相手にしての普及、宣伝活動は、コミュニケーションの問題に直面する。手話、口話、筆談といった手法は、多数の健聴者が相手の場合、十分なコミュニケーションに困難をとまなう場合が少なくないからである。したがって、何のために知名度を上げるのかという点について、明確な理念が、他のバラスポーツ以上に必要となる。

最終的には、聴覚障害者への社会の理解を深めることが、デフリンピックの知名度を上げる真の動機であるとすれば、スポーツそのものの普及宣伝に先だって、社会的コミュニケーションの円滑化への努力こそが、まず求められねばならないとも考えられよう。すなわち、たとえば、健聴者の方での手話言語の普及活動といったことが同時に行われることがデフリンピックの知名度向上に必要といえよう。

（6）報道関係者などとのコミュニケーションの仕方の問題

知名度向上の問題と関連して、そもそも、報道関係者とデフリンピック選手との間のコミュニケーションの態様がどうなっているかの問題がある。そこがスムーズに行われなければ、そもそも、デフリンピックについての、深く、広い報道は行われないこととなりかねないからである。

この点に関連して、デフリンピックについての報道において、そもそも、報道する側の記者と、発信する側の選手と間のコミュニケーションがどのように行われたかということ自体について、報道されているかどうかの問題がある。

多くのインタビュー記事においてはこの点についてまったく言及がないが、中には、言及のある報道も存在する（選手と地方自治体の長などとの面会についての記事や、学校での生徒と選手との交流についての記事などでは、多くの場合、「手話で」とか「手話通訳を通じて」といった、コミュニケーションの方法自体についての記述がある場合が少なくない）（『朝日新聞』2017年6月23日鳥取朝刊、『読売新聞』2017年7月14日群馬朝刊、『読売新聞』2017年9月5日朝刊）。

選手個人への報道関係者の個別インタビューにおけるコミュニケーションの仕方につ

いての具体例としては、朝日新聞石田貴子記者の三枝浩基選手（陸上）へのインタビューで「ノートとパソコンを使った筆談で取材」といった記述がある（『朝日新聞』2019年1月24日兵庫朝刊）。また、おなじく朝日新聞三嶋伸一記者の設楽明寿選手についての記事で、「手話通訳を通じて」という記述がある（『朝日新聞』2017年7月14日茨城朝刊）。しかし、そうした記述は比較的稀であり、選手からの情報入手およびその深さ、広さについて困難があるのではないか、という点についての記述はいたって少ないことがみてとれる。

他方、デフリンピック大会自体についての報道で、デフリンピックならではの点がどこまで報道されているかについてみると、たとえば、君が代の斉唱が、手話で行われたこと（『朝日新聞』2017年7月29日夕刊）、開会式の演出で、大きなスクリーンに手話通訳が映し出されたことなどの記述がみられるが（『読売新聞』2017年7月20日朝刊）、コミュニケーション問題に焦点を絞った解説はほとんどなく、今後の課題の一つであろう。

（８）選手の意識とその変容

デフリンピック大会出場、ないしそれを目標としている選手たちの意識については、何と言っても、同じ障害を持つ者を鼓舞したい、勇気を与えたい、夢を持たせたいといった思いが強い（注10）。こうした意識は、言い換えれば、自分の努力で障害を乗り越えられることを示したいという思いであると見なすこともでき、その意味では、障害の克服を身をもって示したいという意識とつながっているといえよう（注11）。

しかしながら、デフリンピックという国際大会への参加、出場体験は、こうした選手の意識に微妙な変化を与えている兆候がみられる。

第一に、日常的なスポーツ活動においては、とにかく、戦うこと、障害を克服するという意識が先立ちやすいのに対して、非日常的体験であるデフリンピック出場にあたっては、むしろ、「楽しみたい」という意識が強く出るケースもみられる（注12）。

このことは、デフリンピックは、常に競争相手が同じ聴覚障害者であり、また、大会の運営も同じ障害者が主体となっており、いわば、聴覚障害が一般化、日常化した世界であり、多くの選手が「聴覚障害を隠そうとせず、逆にみせにきているようなオープンな姿勢」である（藤原慧選手の発言、『読売新聞』2017年7月26日朝刊）という雰囲気の影響しているともいえよう。こうした意識が強まると、障害は障害というよりも一つの個性であるという見方につながることもあり得る。この点に関して、自転車選手の早瀬久美選手は、「私は耳が聞こえないけれど、一人一人は違うことが当たり前だと受け止めています」と述べている（『読売新聞』2020年9月29日朝刊）。

加えて、デフリンピックでは、選手が国の代表として出場していることからくる意識の転換もある。すなわち、ここでは、選手は障害者ではなく、あくまで国の代表であるという意識を持つようになる（注13）。いいかえれば、ここでは、選手は障害者ではなくあくまで日本を代表するスポーツ選手となるのであった。

ここには、一つの逆説が存在する。すなわち、障害者が障害を克服し世界的大会に出場すると、選手はある意味で、一般の「障害者」から離れた存在になっていくおそれがあるということである。ただ、パラリンピック大会と若干異なり、デフリンピック大会は、聴覚障害者のアイデンティティを強化する行事でもあることから、選手の意識の「変容」は、機微な要素を含むものといえよう。

注

- (1) 中島・天野（2019）で、聴覚障害者は「横方向動体視力が優れていることがわかった」とされているが、そうした能力の強化・維持にスポーツがどう役立つのかという問題もあるように思われる。また、この問題一般（平衡感覚の欠如とスポーツとの関係）については、筑波技術大学中島幸則教授の調査によれば、直立姿勢保持中に静止面へ指で軽く触れる、体性感覚入力（light touch）を行うと、聴覚障害者のバランス機能が改善するとされている。中島幸則（2016）「聴覚障害者の平衡機能評価と機能低下改善プログラムの開発」科学研究費助成事業 研究成果報告書。
- (2) 最初の五輪大会である1896年のアテネ大会では、女性参加者はゼロ、1924年のパリ大会でも4.4%に過ぎなかったと言われる。日本スポーツとジェンダー学会、2016、p.20。
- (3) Le Comité International des Sports Silencieux（略称はCISSであり、英語名は、The International Committee of Silent Sports：ICSS）「国際サイレント・スポーツ委員会」は、のちに Le Comité International des Sports des Sourds（略称はCISSであり、英語名は、The International Committee of Sports for the Deaf：ICSD）「国際ろう者スポーツ委員会」と名称を改めた。ICSD 憲章によれば、同委員会はフランス語名の頭文字である CISS と、英語名の頭文字の ICSD の両方を使用している。International Committee of Sports for the Deaf, Deaflympics Constitution, <https://www.deaflympics.com/icds.asp?constitution>（2017年10月21日取得）。本稿では特に断りのない限り「国際ろう者スポーツ委員会」のことを CISS と表記する。
- (4) この点とも関連して、各国国内のろう者のスポーツ大会への参加資格の問題もある。通常、全国大会への出場資格は比較的限定的であるが、地域レベルでは、条件が緩やかである場合が多いと言われる。これは、地域レベルでは、スポーツ行事への「参加」が重視されるが、全国レベルでは競争条件の厳格化が要求されるからとみられるが、厳格な競争条件を用いると参加資格の認定に費用がかかるといった問題や、競技団体が所属メンバーの増加をはかりたいという思惑がある場合もあるという。因みに、わが国のパラスポーツ大会及びろう者体育大会における聴覚障害者の区分は、聞こえ方による区分はされていない。補聴器の使用については、競技の上であまり有利にならないだろうという判断から、日常生活で使用しているものは使用してさしつかえないとされている。また、聴覚障害者の出場可能競技種目は、陸上（400m、スラローム、4×100mリレー、ビーンバック投を除くすべての種目）、水泳（リレー種目を除くすべての種目）、アーチェリー、卓球、フライングディスク、バレーボールであり、出場できない競技種目は、ボッチャ、ボウリング（静岡県予選には知的障害以外も出場していた）、バス

- ケットボール、車いすバスケットボール、ソフトボール、グラウンドソフトボール、サッカー、フットベースボールである。
- (5) 卓球の船越京子選手は、中学のとき、バスケットボール部に入れなかったという。『朝日新聞』2004年12月11日朝刊。
- (6) 薬剤師の資格についての自転車の早瀬久美選手のケースがある。『朝日新聞』2022年6月9日夕刊。
- (7) 同様の指摘は競泳の金持義和選手によってもなされている。『読売新聞』2017年7月4日朝刊。
- (8) 例えば、サムソン大会の日本選手団長であった山根昭治氏の発言。『読売新聞』2017年8月1日朝刊。
- (9) 具体例としては、東京で開催されたもの（『読売新聞』2022年3月27日朝刊）、横浜で開催されたもの（『読売新聞』2019年2月20日神奈川朝刊）などが報道されている。
- (10) たとえば、バレーボールの尾塚愛実選手（『読売新聞』2017年7月14日鹿児島朝刊、『読売新聞』2022年5月3日鹿児島朝刊）、水泳の金持義和選手（『読売新聞』2017年7月4日朝刊）など。
- (11) この点について、陸上競技の佐々木琢磨選手は、「自分が努力すれば障害の有無にかかわらず戦える」ことを示したいという表現で述べている。『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊。
- (12) たとえば、水泳の藤原慧選手は、デフリンピック大会への出場体験について「レースを楽しむ出場者を見て、まずは楽しむことが大事だと思って泳いだ」と述べている。『朝日新聞』2017年8月7日島根朝刊。
- (13) この点について早瀬久美選手は「耳の聞こえない人の代表ではなく、国民の代表 としてがんばりたい」と表現している。『読売新聞』2017年6月29日朝刊。

表5の注

- 1 『読売新聞』2020年1月22日神奈川朝刊、『朝日新聞』2022年7月26日神奈川朝刊、『毎日新聞』2022年9月13日朝刊。
- 2 『読売新聞』2022年4月27日朝刊。
- 3 『読売新聞』2017年7月14日朝刊。ほぼ同じ内容の記事としては2017年8月26日『読売新聞』鹿児島朝刊がある。後者では「生まれて間もなくの診断で」とされている。
- 4 『読売新聞』2023年8月4日鹿児島朝刊。
- 5 『読売新聞』2023年8月2日佐賀朝刊。
- 6 『朝日新聞』2019年11月1日佐賀朝刊。
- 7 『読売新聞』2018年3月15日山形朝刊。
- 8 『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊。
- 9 『朝日新聞』2022年5月26日青森朝刊。
- 10 『朝日新聞』2017年7月14日茨城朝刊。
- 11 『毎日新聞』2018年1月6日静岡朝刊。
- 12 『朝日新聞』2017年11月28日北海道朝刊。
- 13 『朝日新聞』2021年9月2日東京夕刊。
- 14 『読売新聞』2017年7月22日朝刊。ほぼ同じ内容の記事（生後間もなく病にかかり難聴）は、『毎日新聞』2019年10月12日東京夕刊。
- 15 『朝日新聞』2017年7月26日東京夕刊。
- 16 『読売新聞』2022年7月20日島根朝刊。
- 17 『毎日新聞』オンライン版2018年8月30日、<<https://mainichi.jp/articles/20180830/k00/00e/050/260000c>>。他方、『朝日新聞』2018年6月25日朝刊では、生まれつき両耳がほぼ聞こえず、小学生のとき人口内耳をうめこむ手術をうけたが、今でも左側に補聴器をつけているとされている。

引用文献

- アモンズ, ドナルダ (2008) 「ろう者スポーツとデフリンピック」『一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会 HP』 <<http://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/presrep-j.pdf>> (2017年10月22日)
- 石川准・長瀬修 (1999) 『障害学への招待』 明石書店.
- 及川力 (1998) 「国際ろう者スポーツ委員会が国際パラリンピック委員会を離脱した要因について」『スポーツ教育学研究』 18(1), 49-54.
- 小倉和夫 (2018) 「デフリンピックの歴史, 現状, 課題及びパラリンピックとの比較」『パラリンピック研究会紀要』 8, 1-16. DOI: https://doi.org/10.32229/parasapo.8.0_1
- 小倉和夫 (2023) 「【研究ノート】デフリンピック大会をめぐる課題」『パラリンピック研究会紀要』 20, 51-67. DOI: https://doi.org/10.32229/parasapo.20.0_51
- 小倉和夫 (2024) 「【研究ノート】デフリンピック関連報道の内容分析と今後の課題」『パラリンピック研究会紀要』 21, 21-35. DOI: https://doi.org/10.32229/parasapo.21.0_21
- 木村晴美・市田泰弘 (1996) 「ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者」『現代思想1996年4月臨時増刊号』.
- 五町歩美 (2010) 聴覚障害者の生涯スポーツにおける「デフスポーツ」の役割『筑波大学大学院体育系修士研究論文集』 32, 45-48.
- 齊藤まゆみ・荒川歩美 (2014) 「日本における成人聴覚障害者のスポーツ活動に対する意識とその現状」『筑波大学体育系紀要』 37, 93-99.
- 財団法人日本障害者スポーツ協会・財団法人全日本ろうあ連盟『第21回夏季デフリンピック日本選手団参加報告書』 2010年.
- 白井正樹 (2001) 「障害者文化論—障害者文化の概念整理とその若干の応用について」『社会福祉学』 42-1, 87-99. DOI: https://doi.org/10.24469/jssw.42.1_87
- 城間将江・鈴木恵子・小渕千絵 (2021) 『聴覚障害学 第3版』 医学書院.
- 全日本ろうあ連盟 (2014) 『第22回夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書』.
- 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 (2017) 「スポーツ競技における人工内耳の装用について」 <<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/resources/aboutci.pdf>>
- 全日本ろうあ連盟 (2018) 『第23回夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書』.
- 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』 2009年, <<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/resources/tsukuba-report.pdf>>
- 東京都オリンピック・パラリンピック準備局 (2022). 『令和3年度 国際的な障害者スポーツ大会に係る調査結果』 <https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/seisaku/details/pdf/sportsgames_survey-04.pdf>. 内閣府 (2023) 『令和5年版障害者白書』.
- 中島幸則・天野和彦 (2019) 「聴覚・視覚障がい者のスポーツ」『知能と情報』 31(6), 165-171.
- 中村有紀 (2009) 『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』
- 日本障がい者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟 (2015) 『第18回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書』.
- 日本スポーツとジェンダー学会 (2016) 「データでみるスポーツとジェンダー」 八千代出版.
- 日本デフゴルフ協会 (日付なし) 「理念・目的」 <<https://jdga.or.jp/about/mission/>> 2024年6月9日取得
- 藤田紀昭 (2013) 『障害者スポーツの環境と可能性』 創文企画.
- Bailey, S. (2008). *Athlete first*. John Wiley & Sons.
- Cabanel, P., & Encrevé, A. (2015). *Dictionnaire biographique des protestants français de 1787 à nos jours* (Tome 1). Les Editions de Paris.

- Groce, N. E. (1985). *Everyone here spoke sign language: Hereditary Deafness on Martha's Vineyard*, Harvard University Press.
- Séguillon, D. (2002). The origins and consequences of the first World Games for the Deaf: Paris 1924. *The International Journal of the History of Sport*, 19(1), 119-136. <https://doi.org/10.1080/714001694>
- Stewart, D. A. (1991). *Deaf sport: The impact of sports within the deaf community*; Gallaudet University Press.

The Past and Present of the Deaflympics

OGOURA Kazuo

This article was written with the aim of providing a comprehensive explanation and evaluation of various aspects of the Deaflympics. It begins by addressing the conceptual differences between “Deaf people” and “people with hearing disabilities.” The article then explores how deafness or hearing loss affects physical activity, as well as the significance and reality of sports participation among deaf people. The article examines the challenges faced by deaf athletes, followed by an analysis of the history and current state of the International Deaflympics. It also looks at organizational issues surrounding the Deaflympics and the structure of related sports federations. Additionally, the article touches on financial constraints and difficulties in international communication in the Deaflympics. Finally, it analyzes the nature, characteristics, and problems of newspaper coverage related to athletes who participated in the Deaflympics.